その日、帰宅して部屋の襖を開けた有希は、自分の目を疑った。

「やったぁ!」

思わず声上げていた。

わずか三畳の狭い部屋。それが有希の城だった。

姉や弟は母親から与えられるもので満足していたが、有希だけは違った。家の玄関マットにまで「これがいい」と口を出した。当然自分の部屋は自分の好きなもので埋めつくしたがった。もちろん、亮子がそんなわがままを許すはずはなく、有希は毎月のお小遣いを貯金したり、不用品を再生させたりしては、ひとつずつお気に入りのものをそろえていったのである。

本棚を倒してマットを敷いた自家製ベッド。母からもらった壊れた鏡台。カラーボックスの上には2客の赤いカップ&ソーサーと友達の写真。花ももちろん欠かさなかった。部屋の隅には大人を気どってウイスキーの空瓶まで並べた。みんなと違う自分だけのスタイルを、有希は着実に築きはじめていた。

かなり自分の理想に近づいてきた部屋の中で、有希はどうしてもベッドの上の布団カバーが気に入らなかった。緑が白く中がレースになっているカバーはどう見てもババ臭く、部屋のかわいらしさをだいなしにしていた。そんなとき、有希は雑誌で理想の布団カバーに出会った。緑が黒のチェックで、中は黒い地に花柄がちらりとあしらってあるそれは、有希の部屋にぴったりだった。

有希はめずらしく母親にせがんだ。だが、それは驚くほど高かった。当然のように亮子は「絶対買わない」とはねつけた。

それから数ヵ月。もうすっかりあきらめていたのに、家に帰ってみるとその布団カバーがベッドにかかっていたのである。

「ありがとう」

心から母にそう言うと、なぜか涙が出てきた。

14歳。

橘くんとの交際は続いていた。

お互いに部活があるため、遠くへ出かけたりするような、特別なデートをする時間はなかった。ただ、部活が終わった後に校門で待ち合わせるのが、ふたりの唯一のデートだった。

最初は家までの道のりを肩を並べて歩くだけだった。だが、しだいにその道のりがあまりにも短く感じられるようになった。

橘くんに家まで送ってもらっては、有希が彼を家に送り、またその後送ってもらう。いつまでたっても帰れないふたりだった。帰りたくなかった。何度もそんなことを繰り返した後、ふたりは有希の家の裏にある海で過ごすようになった。

砂浜に腰かけて、毎日、いったい何時間を過ごしただろう。

何か話すわけでもない。ただ、ふたりで海を見ていられればよかった。やがて夕闇が訪れて、夜の帳が下りてきても、ふたりはずっと波の音を聞きながら、海と月を見つめていた。

手をそっとつないだだけでうれしかった。

レコードで聞いていた曲の歌詞の意味が、はじめてわかったような気がした。好きな人に触れたい、抱きしめたい、という感情はごく自然に生まれてくるものなのだと、はじめて感じた。毎日が発見の連続だった。

それは、本当の恋の深さをまだ知らない少女が、相手のこと以上に自分自身の“好き”という感情に夢中になるような、憧れにも似た恋だった。

ベッドに入る前には、そんな思いを毎日日記に綴った。ふたりで交わした会話の一部始終もすべて細かに書きとめた。

(神様、私を14歳のままでいさせてください)

本気でそう願った。

ぱたりとノートを閉じて窓辺に立つと、ひんやりと夜の風が吹いてきた。

潮の香りを含んだすっぱい風。

空が細い。星屑がきらめいている。

(明日もきっと晴れになる)

14歳の日々は、毎日が新鮮な喜びに輝いていた。